

誰だらう、さう思はれるのにも慣れた。全然寂しくないぞの歩幅

大塚泰子

知られない私、或いは、おぼえてもらえていない私。そんな私の強がりをユーモラスに表現。口語の呼吸そしてリズムを短歌形式のなかにうまく生かして印象的な作に仕上げた。ただ、どんな場面か、場所はどこか、ニュアンスがずいぶん変わる。何かのヒントへ読者を誘導する指標がほしかった。

またたく間に慰安婦像が立ち並び、私は母語に必死にすがり

羽鳥潤

日本のパースポーツを持つて外国に住むと、日本に居るときより先鋭に日本人であることを意識する、ということはある。韓国人の日本人批判を個人として受けとめてしまいそうな戸惑いの表現的確である。作者はアメリカに在住。

コーンステップは急いで飲んでも美味しいくて夢の中でも口を舐めたり

上原良美

「コーンステップ讃歌」として、ホテルオーケラとか帝國ホテルのステップ缶詰のコマーシャルに売つたらどうか。作者はコーンステップ大好き人間なのだろう。今月の作にはもう一首、コーンステップの歌があつて、ともども、この作者独特的のユーモアの歌に仕上がつてゐる。

居たる部屋出づれば真つ暗闇の家一人の寒さしみとほる冬

戸塚園枝

何部屋がある家の中で、電灯がついているのは一部屋だけ。日暮れまでずっとその部屋にこもつていたのである。「居たる部屋……」という冒頭の入り方が、うまい。

合格の娘のやや痩せた両頬をすぢとなりゆく春のみづはも

花美月

受験にうかつた娘さんの涙である。ポイントはやはり、涙と言わず「みづ」という語を使つたことの可否と、筋と「なる」ではなく「なりゆく」と時間の長さを取り込んだ点である。何度も読み返すと、母親としての情に流れなかつた点はよしとしながら、「春のみづ」はやはり凝りすぎか、と思えてくる。

茫茫々と雪降る烟に立ち尽くし何所から来たという声を聞く

尾上宏

「何所からきた?」という疑問の意味だろう。何もない冬の烟で誰かの声を聞いたというのである。いつたい誰の声か。その土地の神、地神の声だろう。決して動くことのない土地の神様を鏡として、動かざるをえない人間の一生が映し出される。

すっぽりと全身埋もれくねるよう飛び出してくる

初めての雪

森祐希子

主語をわざと消してあるが、子犬だと読める。生まれて初めての雪に、とまどい、喜ぶ子犬。主語を表現の工夫と四句切れの採用で特色を出した。

日照り雨過ぎる谷中の御墓辺に久に行きえり幸綱

高野智佐子

短歌の現在

No.398 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

先生